

しゅにえさん  
《修二會讚》 no.57 (1978)

だんせい  
(男声)

1. なんぼくといあわせ  
南北問合

なんぼく なんざ きたざ  
南北。南座は。北座も。

くようもん  
供養文

へむりょう によせによ さい ほじょじう  
辺無量。如世如 (一) 切。法常住。

ぜ こがき  
是故我帰 (依)。

さんげぜんだん  
散華前段

こうみょうーしーいーいーいじょうーうーうーうーうー  
光明熾盛。

せうじっぼ ざいめえさあーあーあーがあーあーい まはじゅ  
照十方。摧滅三界魔波旬。

ぼじょおくううのおおう かーんぜおーん  
拔除苦惱。觀世音。

フ げんいさあああいだいじんりきこーみよーしじょー  
普現一切大神力光明熾盛。

さんげこうだん しゅがん  
散華後段 (呪願)

がんにーしーいーくーうーうー  
願以此功。

かいぐじょうぶつんど こけ  
皆俱成仏道。香花。

2. しゅがん  
呪願

たーいじつじょらーい こげんこたーい りえきぶへーん そい きんしゃ ばかちより  
大日如来 弘願廣大 利益無辺所以今者 摩訶長吏

そしたーいしーう としんこりょく れんこーほりよ よしつぽてん ばーいねんじげつ  
所司大衆 同心合力 練行法侶 於此宝殿 毎年二月

じしちじちや そげーん したーい げーんぞーぼんがイ せうきよおさん か しかくとべーい  
二七日夜 莊嚴此台 懸繪幡蓋 焼香散花 四角灯明

ちうどくたーいしーう やれいほこう りくし ことう しよじょしうふく しよじょしうせーん  
昼読大乘 夜礼宝号 六時行道 種々修福 種々修善

ぶりょうぶへーん いしいこどく せんによかいきょう はんぜきしてーん りょうしん はつぽ  
無量無辺 以此功德 先用回向 梵釈四天 竜神八部

いっせいしんぎ 一切神祇	かくそうほりやく 各増法樂	きやらんこうほ 伽藍護法	はつんだいべしーん 八大明神	はつんばんさんそ 八幡三所
けひききた 氣比氣多	じしうぎよそ 二十五所	ぎよはくよそ 五百余所	いにんけんせい 院々勸請	とういんこうほ 当院護法
えんぶはーんと 遠敷飯道	いこうそえき 威光増益	こえきしんと 行疫神等	いっせいしんべ 一切神明	とざんほみ 等飡法味
とがせれい 登霞聖靈	ほんげんさんそ 本願三所	せいぶこてい 聖武皇帝	じーんぜこごう 仁聖皇后	こーけんじよて 孝謙女帝
ほういんそんし 法印尊師	はっしゅそんし 法主尊師	かきよれんこ 過去練行	いっせいれと 一切靈等	かいせいふつと 皆成仏道
せうちやうあんにーん 聖朝安穩	そちやうほしーう 增長宝寿	たーいしやうてんこ 太上天皇	ぎよげんーねんばーん 御願円満	はっかん 百官
けきぼちやくーん 国母儲君	しんのうしよお 親王諸王	さいうてんか 左右殿下	だいちやうどげん 大中納言	はっさこうけい 八座公卿
ぶんぶはっかーん 文武百官	いちいちせーんげん 一一善願	じょいばんぞく 如意満足	きやらんちより 伽藍長吏	そちやうほしーう 增長福寿
そしたーいしーう 所司大衆	かっくげんねんばーん 各願円満	なぼこしう 南無教主	せいきやーじよらーい 釈迦如来	
ぼちせそん 牟尼世尊	しやちうかいかーい 常住界会	かんにんさつた 観音薩埵	いっせいさんぼ 一切三宝	としんかこお 同心加護
としんよごお 同心擁護	れんこうほりよ 練行法侶	せうちやうふしよ 消除不祥	じよげきさいか 除却災禍	だーいがーいしんじゅ 内外心中
いちいちせいげん 一一誓願	かいしーつばーんぞく 皆悉満足	じつじーつせしう 日々施主	せうちやうふしよ 消除不祥	
いちいちせーんげん 一一善願	じょいばんぞく 如意満足	しうらいしうじん 集来衆人	かくげんねんばーん 各願円満	
きやらんあんにーん 伽藍安穩	けウりうふっぼ 興隆仏法	てんがたーいあん 天下大安	ふううしゆんし 風雨順時	ごこくせいしーう 五穀成就
ばんみーんかいらやく 万民快樂	よぶんこどく 余分功德	さんにうはっかーい 三有法界	きちうしうせい 其中衆生	
としゅうくげん 等出苦患	せいぶしよとおお 成無上道			

### 3. 称名悔過前段

しょうみょうけかぜんだん

ンなむううびるしゃなぶ　　ヘンじゅうほっかい　　るしゃなぶ　　とーがしよーりよー  
南無毘盧舍那仏　　遍周法界　　婁盧舍那仏　　登霞聖靈

じよーしよーおがく　　おんどくこーだい　　ふかありよー　　りよーぼーくじゅー　　りううじよー  
成正覺　　恩徳広大　　不可量　　令法久住　　利有情

ふだらクセン　　かあんのおんほーでん　　しゃかあそん　　とーらあいけうしゅ　　じしそん  
補陀落山　　観音宝殿　　釈迦尊　　当来教主　　慈氏尊

こうらあいげんざい　　じょうじうさんぼ　　しよおちかいへんぜう　　しよוגんうによらい  
去来現在　　常住三宝　　聖智海遍照　　莊嚴王如来

いっさいによらい　　おうしやうとがく　　きんこおうしし　　ゆーぎによらい  
一切如来　　応正等覺　　金光獅子　　遊戯如来

びやくれんげげん　　(無障礙)　　ちよーしじよーくどつ　　こうおうによらい  
白蓮花眼　　頂熾盛功德　　光王如来

まんどおくえんまん　　みいおんこうによらい　　かんのおんほんじ　　あみだによらい  
万徳円満　　美音香如来　　観音本師　　阿弥陀如来

かんのおんほんだい　　しようぼみようによらい　　ふこーくどく　　せんうによらい  
観音本体　　正法明如来　　普光功德　　仙王如来

(舍利)　　ぎよーぞー　　ふずほおとー　　じいウイチめんじんじゅしんぎよー  
形像　　補函宝塔　　十一面神呪心經

じゅーいちくていしよぶつ　　じんじゅしんぎよー  
十一俱胝諸仏　　(所説)　　神呪心經

### しょうみょうけかこうだん 称名悔過後段

なむいっさいいしよぶつ　　どうさんずいきー　　なむいっさいによらい　　おくじしゅごー  
南無一切諸仏　　同讚随喜　　南無一切如来　　憶持守護

なむこじしよーじ　　てうしまあんごー　　なむしゃばせかい　　のうけけしゅー  
南無居士生死　　超四万劫　　南無娑婆世界　　能化主

なむじゅイチメンだいひいしゃー　　なむとぜんサンメンじひいそー  
南無十一面大悲者　　南無当前三面慈悲相

なむさへんサンメンしんぬうそー　　なむうへんサンメンびやくげえそー  
南無左辺三面嗔怒相　　南無右辺三面白牙相

なむとウゴイチメンぼしよおそー　　なむちよウジョイチメンによらいそー  
南無当後一面慕笑相　　南無頂上一面如来相

なむちよウジョブツメンじょうやくうびよー　　なむさいジョブツメンがんまんぞおくー  
南無頂上仏面除疫病　　南無最上仏面願満足

なむしよズカンチウじうけえぶー　　なむさグレンゲぐんじいしゅー  
南無諸頭冠中住化仏　　南無左紅蓮花揮持仏

なむうケイシュシュセむいしゅー      なむしゅポヨウラクしょうごんたあい  
南無右桂数珠施無畏手      南無衆宝瓔珞莊嚴體

なむむりョウジンセンしよいいによ      なむだいジッピセツこんぼんとしゅー  
南無無量神仙所圍繞      南無大慈悲説根本等呪

なむりエキアンラクしよおうじょー  
南無利益安樂諸有情

#### 4. 宝号上段

なあむかあんじざあいぼさ      ざいぼさ      かんじざあいぼさ      ざいぼさ  
南無觀自在菩薩      自在菩薩      觀自在菩薩      自在菩薩

じざあああーいぼさ      なあムかんじざあいぼさ  
自在菩薩      南無觀自在菩薩

#### 宝号中段

なむう      なあむかんじざい      なむかんじざい  
南無。      南無觀自在。      南無觀自在。

なむう      なむかんじざい      なむかんじざい  
南無。      南無觀自在      南無觀自在。

#### 宝号下段

なむう      なあむかん      なむかん      五体いでたまえ  
南無。      南無觀      南無觀-----

#### 5. 貝と三礼文

きょーごーてんじんちぎほらこんごーりょーしゅ      さいくぎょおーじーき  
驚嚮天神地祇法螺金剛鈴呪      一切恭敬自歸

えーふとがあーあんしゅじょおー      えほとがあーあんしゅじょおー  
依佛当願衆生、依法当願衆生、

えーそとがあーんしゅじょおー  
依僧当願衆生

たいげたいど      じんにゆきよぞ      とりだいしゅさいむげ  
体解大道、深入經藏、統理大衆一切無礙

#### じんみょうちよう 神名帳 第一段

ン例におって依ってだい菩薩みょうじんと一つ      だい明神等      かんじよう勸請したて

まつらん

きんぶだいぼきはつまん さんじょ だいぼきこーもん 大菩薩興文 大菩薩興成

大菩薩興松 大菩薩興明 大菩薩

けいの大菩薩 けたの大菩薩 ちくぶしまの大菩薩

つたらの大菩薩 すみよしの大菩薩 あざかの大菩薩

しらやまの大菩薩 なちの大菩薩 つきのわの大菩薩

たきのくらの大菩薩 かわらの大菩薩 おみねの大菩薩

ほーとほーごんりょうじょ  
法童法護両所の大菩薩

## 神名帳第二段

ンにじうごしよ だいまようじん いみち だいまようじん みごまり だいまようじん  
二十五所の大明神 飯道の大明神 水分の大明神

おにう だいまようじん ふる だいまようじん  
遠敷(小入)の大明神 布留の大明神

おおやまと だいまようじん たつた かわい  
大和の大明神 竜田の大明神 河合の大明神

かもげじょー いなり まつお  
賀茂下上の大明神 稻荷の大明神 松尾の大明神

かたおか ひえ  
片岡の大明神 比叡の大明神

ひら だいまようじん ンないげ だいまようじん  
比良の大明神 内外の大明神

にっぜんこおくげんりよじょ あつた  
日前国県両所の大明神 熱田の大明神

たど だいまようじん みしま だいまようじん かしま  
多度の大明神 三島の大明神 鹿島の大明神

すっぱ あまげし なんじ すく  
諏訪の大明神 天滅の大明神 汝の大明神少

<sup>なんじ</sup> 汝の大明神    <sup>しつとん</sup> 委文の大明神    <sup>かなむら</sup> 金村の大明神

<sup>つきた</sup> <sup>だいまいようじん</sup>  
槻田の大明神。

### 神名帳第三段

<sup>あめし</sup> <sup>だいまいようじん</sup> <sup>はかにし</sup> <sup>だいまいようじん</sup>  
雨師のオン大明神    墓西のオン大明神

<sup>いけひめ</sup> <sup>おわしお</sup> <sup>すじ</sup>  
池咩の大明神    小鷲尾の大明神    須智の大明神

<sup>そが</sup> <sup>いんべ</sup> <sup>かんごづくり</sup>  
曾我の大明神    忌部の大明神    鏡作の大明神

<sup>うなて</sup> <sup>もりや</sup> <sup>なわて</sup>  
雲手の大明神    杜屋の大明神    畔の大明神

<sup>いざかわ</sup> <sup>たまでしま</sup> <sup>だいまいようじん</sup> <sup>みざき</sup> <sup>だいまいようじん</sup>  
巒河の大明神    玉出島の大明神    御崎の大明神

<sup>ひあかし</sup> <sup>うねび</sup> <sup>ほづみ</sup>  
火明の大明神    宇称奈の大明神    穂積の大明神

<sup>こつひめ</sup> <sup>すず</sup> <sup>だいまいようじん</sup> <sup>くましろ</sup> <sup>だいまいようじん</sup>  
木津咩の大明神    鈴の大明神    熊代の大明神

<sup>そさのお</sup> <sup>ちつき</sup>  
殊菱烏の大明神    千築の大明神

<sup>きんぶ</sup> <sup>さんじゅうはっしよ</sup> <sup>はつだいらいりウレウひきた</sup>  
金峯三十八所の大明神    八大竜衆引田の大明神

<sup>うねつか</sup> <sup>あずま</sup> <sup>おーかみ</sup>  
宗墓の大明神    東大の大明神    狼の大明神

<sup>いその</sup> <sup>うえつき</sup>  
磯野の大明神    殖槻のだあ伊みょうじん

<sup>さかど</sup>  
坂戸のだあ伊みょうじん

<sup>やけ</sup> <sup>もり</sup>  
家のオ杜のだあ伊みょうじん

<sup>いまき</sup>  
今木のだあ伊みょうじん。

### 神名帳第四段

さかや たま ね や くまくら  
酒屋の大明神玉 寝屋の大明神 熊鞍の大明神

たかの ひうが たちやま  
高野の大明神 日向の大明神 立山の大明神

あ そ きりしま ひらきき  
阿蘇の大明神 霧島の大明神 開聞の大明神

おかだ か も  
大明神 岳田賀茂の大明神

にっら つんの ひきつか  
入羅のン角の大明神 疋東のン大明神

うえくり おりい つしま  
殖栗の大明神 下居の大明神 津島の大明神

くわうち  
桑内の大明神

## 神名帳第五段

さ たけ むろ うりゆけつはやぶさ  
狭竹のン大明神 室生竜穴 隼のン大明神

いく ね い ど た ちからお  
伊久禰の大明神 井戸の大明神 手力男の大明神

おーさ いんな  
大佐の大明神 忌穴のン大明神

みずこりてんじんたま そ  
水氷天神玉祖の大明神 ちわやの大明神

むらやまのお す じ  
むらやまの大明神 於須智の大明神

なかやまた か や あま  
中山高屋の大明神 甘ぐちの大明神

いつけ さ  
池のン大明神 佐びの大明神

りうせんてんじん か な じ しのだ  
竜泉天神 我南寺の天神 篠田の大明神

とよ くんぶ さくらした  
豊うみの大明神 旧府の大明神 桜下の大明神

ふく ふ せ だ  
福よしの大明神 布勢田の大明神

ぜん かん だいまようじん きよ  
善ざかんの大明神 清ざかんの大明神

くろしま だい かも  
黒島の大みよう神。

## 神名帳第六段

やしま ま からおだいこくてんじんかんの  
八島のおん大明神 摩訶羅大國天神神野の大明神

ろくどー だいまようじん みつさき よしだ いずもりょうしよ  
鹿稻の（大明神）水前の—吉田の—出雲両所の—

まきのお こーや みずひかり いちのべ くすもと  
槇尾の—高野の—水光の—市辺の—楠本の大明神

たかおか いなむら おーすみ さかもと  
高岡の—稲村の—大居の—坂本の（大明神）—

ふなやべとのへ くめ からひさこ おーき  
船八部斗野部の—久米の—唐呉の—大木の—

たむら きよたき たかふし さなみ  
田村の—清滝の—高伏の佐那見の—

ぎおん てんじんきよわらうじ  
祇園の天神清原氏の大明神

かつらぎうじ かもかわ だいまよ じん  
葛木氏の大明神 上河の大明ウ神

## 神名帳第七段

おおその だいまようじん はだ てんじん おさけ  
大園の大明神—秦の天神—大酒の大明神

さかのえうじ おおとも まかかも つま おーひげ  
坂上氏の—大伴の—摩訶賀茂の—妻万の—大比介の—

のみや たかせ ゆるぎ うきた たてほこ  
野宮の—高瀬の—由留木の—浮田の—楯鋒の—

ならい ひろはま いくね あわか えしま  
奈良井の—広浜の—生根の—粟鹿の—絵島の—

みずこし たけしま さわら うこそ たていし  
水越の—竹島の—佐原の—鶺鴒古曾の—立石の—

しーろ なつみ  
志呂の—夏身の—



むろぎ かもつき  
牟呂岐の大明神 賀茂月の大明神

くずや ふたがみ うなむ  
久須夜の大明神 両神の大明神 宇那牟の大明神

はやしざき おやなぎ わきおか  
林前の大明神 小楊の大明神 脇岡の大明神

かわかけ  
河蔭の大明神

## 神名帳第八段

てん たいはく ご ず てんの一 む どうてんじんじゃどつきしんの一  
天に太白牛頭天王 武答天神蛇毒氣神王

ださいはッピンにつぼんしう う か じ み かん じ  
大歳八神日本洲 有官知未官知

まんさんぜんしちはくよしよだいみようじんとう  
万三千七百余所大明神等

ないちょうず  
内手水

用事やなされ候

(女声)

## 散花の音

s\_\_\_\_,sssss.....,si,so,su,se,sa,  
sh\_\_\_\_,sh sh sh.....,shi,sho,shu,she,sha,  
ch\_\_\_\_,chi,cho,chu,che,cha,.....

上例の摩擦音(母音は発音せず息音だけ)を、さまざまの長さ、強さ、表情で各自作意に発声する。

日本書紀卷二十四 皇極天皇

あめとよたからいかしひたらしひめのすめらみこと ぬなくらのふとたましきのすめらみこと ひひこ  
天豊財重日足天皇は、亭中倉太珠敷天皇の曾孫、

おしさかのひこひとおほえのみこ みまご ちぬのおほきみ むすめ  
押坂彦人大兄皇子の孫、茅渟王の女なり。

いろは きびつひめのおほきみ まう  
母をば吉備姫王と曰す。

おきながたらしひひろぬかのすめらみこと た きさき な  
息長足日廣額天皇の二年に、立ちて皇后と為りたまふ。

かむなづき おきながたらしひひろぬかのすめらみことかむあが  
十三年の十月に、息長足日廣額天皇崩りましぬ。

はじめのとし はるむつき ひのとのみ ついたちかのとひつじのひ きさき あまつひつぎしろしめ  
元年の春正月の丁巳の朔辛未に、皇后、即天皇位す。

そがのおみえみし も おほおみ もと ごと  
蘇我臣蝦夷を以て大臣とすること、故の如し。

おほおみ こいるか また な くらつくり みずか くに まつりごと と いきほひかぞ  
大臣の兎入鹿、更の名は鞍作、自ら国の政を執りて、威父

まさ  
より勝れり。

やよひ ひのえたつ ついたちつちのえうまのひ くも な あめ  
三月の丙辰の朔戊午に、雲無くして雨ふる。

こ つき ながめ  
是の月に、霖雨す。

みなづき きのととり ついたちかのえねのひ こさめ  
六月の乙酉の朔庚子に、微雨ふる。

こ つき おほ ひで  
是の月に、大きに旱る。

あきふみづき きのえとら ついたちみずのえいぬ まらうどほしつき い  
秋七月の甲寅の朔壬戌に、客星月に入れり。

ひのえねのひ そがのおみいるか しとべ しろすずみ こ え  
丙子に、蘇我臣入鹿が豎者、白雀の子を獲たり。

こ ひ おな とき あ しろすずみ も こ い そがのおほおみ  
是の日の同じ時に、人有りて、白雀を以て籠に納れて、蘇我大臣に

おく  
送る。

つちのえとらのひ まへつきみたちあいかた い  
戊寅に、群臣相語りて曰はく、

「<sup>むらむら</sup>村村の<sup>はふりべ</sup>祝部の<sup>をしへ</sup>所教の<sup>まま</sup>隋に、<sup>ある</sup>或いは<sup>うしうま</sup>牛馬を<sup>ころ</sup>殺して、<sup>もろもろ</sup>諸の<sup>やしろ</sup>社の<sup>かみ</sup>神  
を<sup>いの</sup>祭る。或いは<sup>ある</sup>頻に<sup>しきり</sup>市を<sup>いち</sup>移す。或いは<sup>うつ</sup>河伯を<sup>ある</sup>禱る。既に<sup>かはのかみ</sup>所効  
<sup>い</sup>無し」といふ。

そがのおほおみこた <sup>い</sup>  
蘇我大臣報へて曰はく、

「<sup>てらでら</sup>寺寺にして<sup>だいじやうきやうでん</sup>大乘<sup>よ</sup>經典を<sup>くゑくわ</sup>転讀み<sup>ほとけ</sup>まつるべし。悔過すること<sup>ほとけ</sup>佛  
の<sup>と</sup>説きたまふ<sup>ところ</sup>所の<sup>ごと</sup>如くして、<sup>ゐや</sup>敬びて<sup>あめ</sup>雨を<sup>こ</sup>祈はむ」といふ。

<sup>かのえたつのひ</sup>庚<sup>おほでら</sup>辰に、<sup>みなみ</sup>大寺の<sup>おほぼ</sup>南の<sup>ほとけぼさち</sup>庭にして、<sup>みかた</sup>佛菩薩の<sup>してんわう</sup>像と<sup>みかた</sup>四天王の<sup>みかた</sup>像  
とを<sup>よそ</sup>嚴ひて、<sup>もろもろ</sup>衆の<sup>ほふし</sup>僧を<sup>ゐや</sup>屈び<sup>ま</sup>請せて、<sup>だいうんきやうら</sup>大雲經等<sup>よ</sup>を讀ましむ。

<sup>とき</sup>時に、<sup>そが</sup>蘇我大臣、<sup>おほおみ</sup>手に<sup>て</sup>香鑪を<sup>こうろ</sup>執りて、<sup>と</sup>香を<sup>こう</sup>焼きて<sup>た</sup>願<sup>ちかひ</sup>を<sup>おこ</sup>発す。

<sup>かのとのみのひ</sup>辛巳に、<sup>こさめ</sup>微雨ふる。

<sup>みずのえうまのひ</sup>壬午に、<sup>あめ</sup>雨を<sup>こ</sup>祈ふこと<sup>あた</sup>能わず。故、<sup>かれ</sup>經を<sup>きやう</sup>讀むこと<sup>よ</sup>を<sup>や</sup>停む。

## 華嚴經〔大方廣佛華嚴經卷大六十、入法界品第三十四之十七その第五〕

<sup>そのとき</sup>爾時、<sup>しやうねん</sup>善財正念して、(中略)又十種の光相を見る。

1. 一切世界の微塵は、一一の微塵の中より、  
一切如来の光明網雲を放ちて、一切世界の微塵と等しく、
2. 一一の微塵の中より、一切佛の種種の色光を放ちて、  
一切世界の微塵と等しく普く法界を照し、

3. 一一の微塵の中より、一切宝雲光明を放ちて、  
一切世界の微塵と等しく普く法界を照らし、
4. 一一の微塵の中より、如来の光焰輪雲を放ちて、  
普く法界を照し、
5. 一一の微塵の中より、一切の香雲を出して、普く法界に薫じ、  
普賢菩薩の所行、一切の大願、諸の功德海を讚歎し、
6. 一一の微塵の中より、一切の日月光雲を放ち、  
普賢菩薩の光明を放ちて、普く法界を照し、
7. 一一の微塵の中より、一切衆生に等しき身雲を出して、  
相好莊嚴し佛の光明を放ちて、普く法界を照し
8. 一一の微塵の中より、一切菩薩の身雲を出し、  
一切行を究竟して法界に充滿し
9. 一一の微塵の中より、一切のほうぎやうさうん宝形像雲を出し、  
十方一切の世界に充滿し
10. 一一の微塵の中より、一切如来の身雲を出して、  
一切世界の微塵と等しく、普く一切の甘露あめふの正法を雨らして法  
界に充滿す  
是を十と為す。

爾時、善財は十種の瑞相を見已りて、即ち是念を作さく、「我今必ず  
普賢菩薩を見て、善根を増長し、菩薩の妙行を究竟して、一切佛を  
見ん。若し普賢菩薩を見ば一切智の想を得ん。」

一心に恭敬して普賢菩薩を見んと欲す。

### 俳句

1. 水取や 井をうちめぐる 僧の息 一茶
2. 水取や 瀬々のぬるみも 此日より 蓼太
3. 水取や こもりの僧の 杵の音 芭蕉